

ニと

2,689^P-1/2

言向く 祀(里) 127~8^P
2918^P 平げる 2694^P

祀(里) 128^主

カトウ川
地名 406
旧印南郡
明治22年
カトウ郡に
編入

〔1〕 ① 神武天皇、 ② 崇峻天皇、 ③ 孝靈天皇

二柱相副ひて、(揃って) 針間(播磨)の氷河の前(加古川町大野の氷河岬)に、忌免(神酒)を入りて神祭りをする為の衣が尖つてゐる(寶)を居る。 針間を道の口(吉備国へ)の道の入口)とし、 吉備国を言向け和しき(平らげた)。

かみ、この大吉備津日子命は、吉備の上つ道の臣の祖ぞ。次に、若日子建吉備津日子命は、吉備の下つ道の臣、笠の臣が祖ぞ。云々

と記されてゐる。

なるほど、

吉備国を平定したのは、孝靈朝のことであつた。

と古事記に明記されてゐるというのに、あえて逆らつて、

吉備国を平定したのは、実は、応神朝のことであつた。

というのはいささか強引すぎる感がある。

給水込屯 2069^P

$$\underline{2,689^P - \frac{3}{2}}$$

記(星)127^P

た」と述べるわけにいかなかったと理解される。

*応神天皇の御世に、中国平定を行なう

と考えてみ

的(ミ)事実を述べたものなのであろう✓

へ孝霊天皇記中「吉備国平定」の記事は

四世紀後半頃の応神天皇の御世の歴史

この物語では、掲載されている部分

水込ませているのかも知れない。

(第1表参照)

⑦孝霊天皇は、①応神天皇に相当

という二つの系譜を単純に対比してみると

②崇神天皇、③垂仁天皇、④応神天皇

【2】

第33表 神武~孝霊朝の対比

[2]	[1]
① 崇神	① 神武
② 垂仁	② 綏靖
③ 景行	③ 安寧
④ 成務	④ 懿德
⑤ 仲哀	⑤ 孝昭
⑥ 神功	⑥ 孝安
⑦ 応神	⑦ 孝靈

〔 2 〕	〔 1 〕
① 崇神	① 神武
② 垂仁	② 綏靖
③ 景行	③ 安寧
④ 成務	④ 懿德
⑤ 仲哀	⑤ 孝昭
⑥ 神功	⑥ 孝安
⑦ 応神	⑦ 孝靈

2693^{P-1/2} 1391
 2,690^{P-1/2}
 紀下390^P 壬申の乱
 紀上318^P 成務
 疾風如濤 1610 路 2120 三軍 916
 東山 東山 東山

東山^{やまのみち}乃^{なり}（本来、山陽道・山陰道の総称だ）
 ったの^うあ^あろう^うに^に、^{やまのみち}三軍^{さんぐん}（周代
 の兵制で、上軍・中軍・下軍からなる軍隊）
 の旗がひらめいた。
 東海^{とうかい}乃^{なり}（本来、瀬戸内海のことも指していたのだ）
 であ^あろう^うに^に、^{やまのみち}崇神^{すうじん}紀^き十年^{じゅうねん}九月^{くがつ}九日^{くにち}条^{じょう}（東海^{とうかい}）
 の列^{れつ}が^があ^あつ^つつ^ついた^{いた}。
 陸^{りく}と海^{かい}との二つの路を、疾風如濤のごとく
 快進撃^{かいしんげき}してゆく大軍勢^{たいぐんせい}。
 それは、いまだかつて見たこともない一大軍
 団^{だん}であ^あつ^つた^た。意気^{いき}込み^{こみ}も又、今までとは^{また}全^{ぜん}く
 違^{ちが}っていた。倭国^{わこく}の総力^{そうりき}が結集^{けつしゅう}された戦闘^{せんとう}で
 あつた。
 一方^{いっぽう}、中国^{ちゅうごく}の^{なかに}温羅^{うんら}乃^{なり}（倭国の襲名の慣例）
 に従^{したが}え^えば^ば、延島^{えんじま}郎^{らう}の子孫^{こそん}は延島^{えんじま}郎^{らう}ということ
 になる^{なる}。鳥^{とり}郎^{らう}すなわち温羅^{うんら}乃^{なり}であ^あろう
 は、倭国軍^{わこくぐん}が攻め上^{あが}つて来^きるとい^いうので、
 「すなわちそ^そ」
 とばかりに、迎^{むか}え撃^{げき}つ能^{なり}勢^{せい}を取^とり、身^み構^{かま}え
 た。

498

H7.8.13(日)
561.8.3(日)
→(ミ)

あむ
目を剥く
目を大きく見開く

元2163P

2.691P

こつよ
手強
1525

おた
立てる
299P

こが
拳
元826
形相
573

でもなかつたか、ええい、葦原醜男め、この
俺を裏切った奴、あつたといふのかし
ただならぬ形相の温羅は、拳を振り上げ
て叫んだ。
「行け。行って奴を叩き殺してしまえ」
「いかになら、第二報・第三報と入る知ら
せは、全て芳しくなかつた。
葦原醜男は、曰「我は邪馬台国の王族の子
孫だ。などと名告をあげ、黄色い軍旗を先頭
に押し立て、猛攻撃をかけてまいります」
「根国の軍は、予想以上に手強いぞいま
す。取り敢えず村人等を掻き集めて戦つ撃つ
てあります。なにせ俄仕立の軍ゆえ、な
かなか思うにまかせません」
「残念ながら御味方はさんざん痛めつけら
れてあります。西方の正規の軍兵を割いてい
ただかなければ、どうにもなりません」
「そんな知らせが入るたびに、温羅はギリギ
リと齒軋りし、目を怒らせて悔しかった。
「ううむ、そうか。そういうことだったの

10月の夜読 2巻2号
誌1 112P

すべしなかつた

2,692 P-1/2

561.8.4⑥

か、醜男め、俺達は、あの孫つた物腰と実し
やかな忠臣面とに、長い間、騙されつづけて
きたというわけか、そうと判っておつたら
とつくの昔にあの首根っこを切り落してや
ていたものを、
だが、今更いくら地団駄を踏んでも、歯
を利き出して悔しかつてみても、遅すぎた。
もはや現時点では、東西の敵の軍勢を相手として、
全力を振り絞り命懸けで戦うよりほかはなかつた。
「えい、えい。負けて帰ろうものなら、ただ
では済まぬぞ。行け、行け」
拍奴国王温羅は、気が狂ったように怒鳴り
散らした。
「かし、拍奴国の兵達は、もう浮足立って
いた。西と東とから挟み撃ちされた恰好で、
どうして存分に戦い得ようか。」
口東山、へ山陽道、を東へ向かう倭国の大軍
は、そんな中国の動揺に乗じ、ずかずかと
敵中深くへ分け入り、都（吉備国の中心地）
総社あたりの方へと、まっしぐらに猛進していつた。

H30(2018)7.6(金)~7.6(土) 行
②690-2/8 (1つづつとしよう)
IF この夏3行

新(2)-303 瀬戸内海の 高地性集落
忍 耐

2.692 - 2/2

な け 国 の 兵 等 は 言 言 の 体 で 敗 走 せ ざる を 得
た 鉄 製 の 武 器 青 銅 製 の 武 器 棍 棒 弓 矢
石 斧 な ど を 手 に す る 者 達 の 長 蛇 の 列 が 続 い た
ま さ に 沸 き 返 る ば か り の 熱 気 が あ っ た
射 放 た れ た 矢 が 鋭 い 音 を 立 て な か ら 飛 ん で ゆ
火 花 を 散 ら す
鉄 剣 の 切 先 が 折 れ て 飛 ぶ
無 数 の 石 礫 が 空 を よ ぎ る
拾 ぬ 国 の 兵 等 は 言 言 の 体 で 敗 走 せ ざる を 得
な け 国 の 兵 等 は 言 言 の 体 で 敗 走 せ ざる を 得

そ ー て 西 の 倭 国 軍 に 呼 ぶ 東 の 母 国 軍
も 忍 耐 の 勢 い で 拘 奴 国 の 都 入 迫 っ た
当 初 の 弥 生 人 達 に 良 田 地 帯 を 奪 わ れ 低
湿 地 や 山 中 の 高 地 性 集 落 等 へ 落 ち 延 び
長 期 間 に わ た っ て 耐 え の 生 活 を 強 い ら 小
て き た 日 扶 余 系 殷 民 の 子 孫 達 が 追 従 し た
俺 も 行 く
己 等 も 行 っ て 温 羅 共 を 退 治 し て や る
長 年 の 恨 み を 晴 ら さ ぬ にお く も の か
と ば か り に 次 々 と 取 っ 合 っ て くる の だ
た 鉄 製 の 武 器 青 銅 製 の 武 器 棍 棒 弓 矢

一族郎党
元123, 2354P

5file 2693P

朝鮮式山城 西都 2690-1/2 145P
あとう 元145P 山陽84P
元109P

2,693P - 1/4

陣取る「日本の伝説」小陽84P
陣を構える元1160P 布元955P
元2688P

鬼面 元1804-1/2

ひよく 肥沃 元1900P
狙う元1731P

付 日本原像し入狙われた肥沃な地

米

鬼城での攻防

大吉備津日子

皇子伊佐勢理毘古の大軍が拍収国の都(総社あたりか)に到った時、

都中は、すっかり蟬の脱殻のようになっていた。拍収国の都を占拠した皇子は、先ず、吉

備の中山とその西の片岡山らの石塁の上

に、陣を布いた。一方、拍収国の王都を打ち捨てた温羅は、一族郎党を引き連れ、

京都の西北方に、現在の鬼城と称され、朝鮮式山城(現在、鬼城と称され、

の内に楯籠った。第4回(総社東部の地図)第4回参照

鬼城は、総延長二・八キロにおよぶ石塁

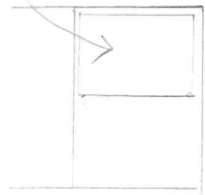
や土塁を築いた山城である。四角形 453 454 455 456 457 参照

2.693^P-3/7

・カウー

・右頁上半部

にはみ出して、
大きく掲載
下さい。



1429

1266

写真図版 453

きののぼり

鬼城北東部

びょうぶあり

屏風折の高石垣

1309

・高石垣が大きく張り出し、下は絶壁となる。

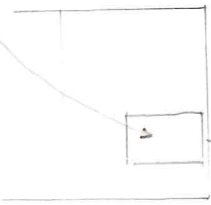
『日本名城百選』村田修三、小学館、2008年9月30日発行、194頁参照。

503^P

2,693^P - 3/7

・カラー

右頁の右下に
大きく掲載
下さい。



はみ出させて
下さい。



1499

写真図版 454

きのぼろ
鬼城

こうご川
神龍石状列石

水のせき

12
2
9

川がき

石垣をもとめなり土塁部において、城壁基部には、長方形の石材を一段一列で緻密に組む。

神龍石状の列石の存在は、他の古代山城と共通する。

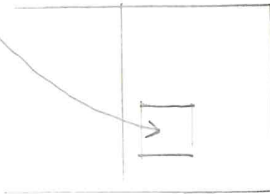
1309

『日本名城百選』村田修三、小学館、2008年9月30日発行、195頁参照。

2,693^p 4/7

・カウー

・右頁の左下に
大きく掲載下か。



140^p 写真図版 455 ^{きのなう} 鬼城 第二水門

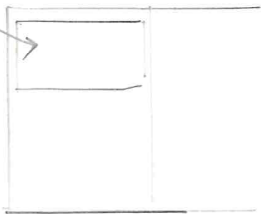
12⁹ 水門は、城壁線が谷を横切る南側の穴々所にある。(※第0水門～第五水門の穴々所である)
130⁹ 鬼城の水門の吐水口は、石垣の基部でなく、上端に開く。

『日本名城百選』村田修三、小学館、2008年9月30日発行、195頁参照、505^p

2,693⁷-5/7

・カラー

左頁の上半分に
左右をはみ出させて
大きく掲載下さい。



1209

1409

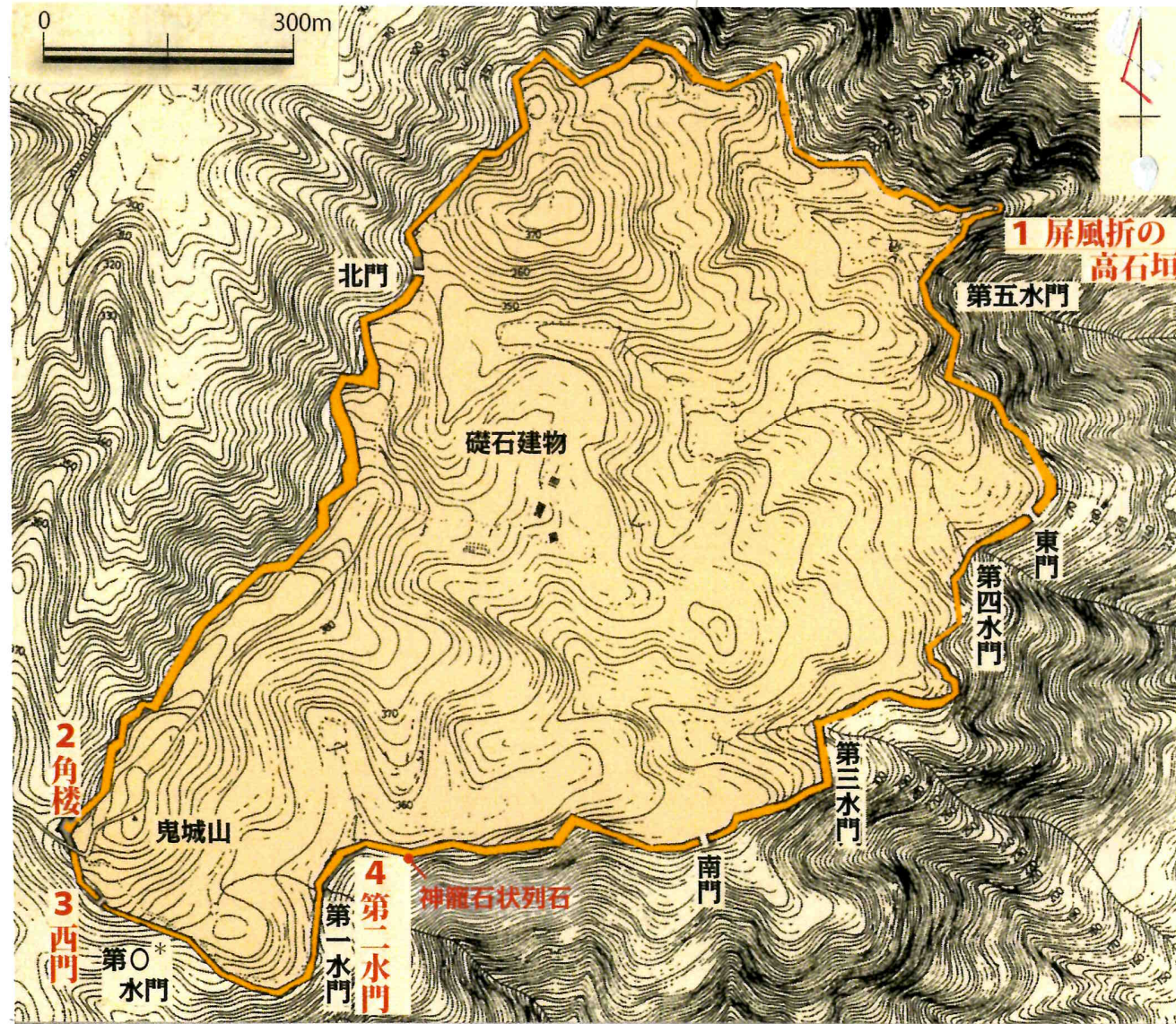
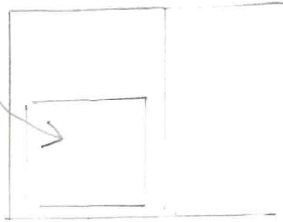
写真図版 456 ^{きのほう} 鬼城の西門遺跡

1304

城壁に開いた 4つの門のなかでは、^{はくなく} もっとも大きく、^{まぐさ} 迫力がある。間口は 12m以上。
^{ふい} 岡山県の歴史 ^{まなび} 藤井学 山川出版社 2000年6月15日発行 ^{くちえ} 口絵の3頁参照。

2.693^P-6/7

- ・カラー
- ・左頁の下半分に、
下をはみ出させて、
大きく掲載下さい。



著作権許諾は
不要でしょう。

13Q4

14Q4

第337図

鬼城

縄張り図

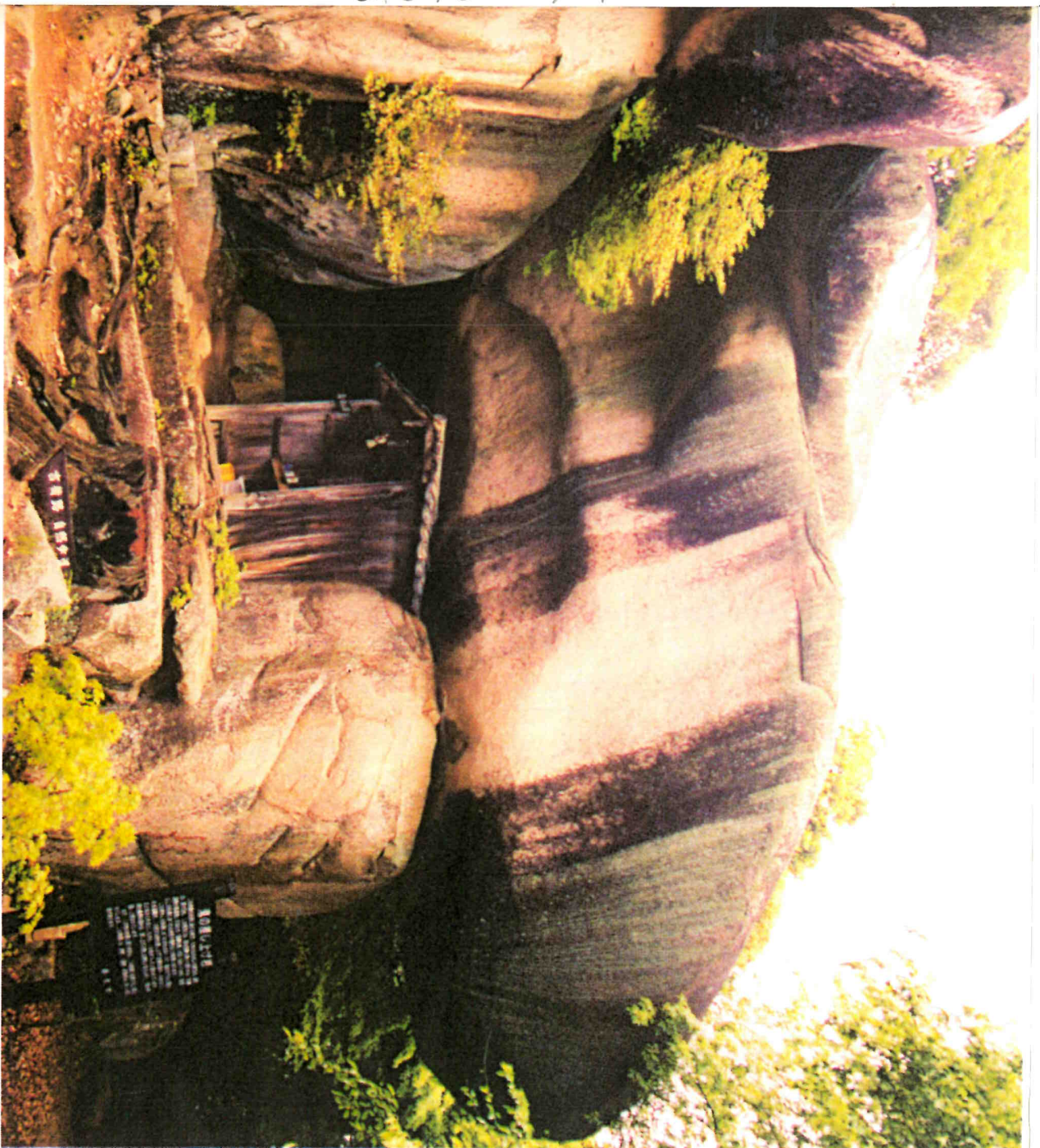
『日本名城百選』村田修三、小学館、2008年9月30日発行、195頁参照

・山城の外周部は、絶壁であることがわかる。礎石建物が有る。

507

2693^P-1/7
17行

- ・カウ
- ・右頁の上分に、限夜一杯はみ出し、大きく掲載下さい。
- ・赤味を、丁度、このくらいに17おいて下さい。



2,693 P-7/7

508

写真図版 457 鬼城 鬼の差し上げ岩

縦15m、横5m、高さ5mの見上げるような巨岩である。

温羅は、手でこの岩を持ち上げ、岩窟を作り住んだという。

『日本全国神話・伝説の旅』吉元昭治、勉誠出版、2009年11月20日発行、634頁

元 昭 岩 記

132
使役 据云 1180 小陽 82° 20' 15"
2940 1180 小陽 82° 20' 15"
人をつかう

同
思
ふ
て
②269
195

記(史)128' 畿内 541' はりま 1827' 総帥 最高指揮官 1290' 2689 1/2 副官 1926' 2,694' 2/2

ひやうやうせ 兵糧攻め 記(史)128' 2689 1/2 886'

1146' 進言 上位の人に意見を申しはるること。

伊佐勢理毘古の軍内に焦りと苛立ちとか目立
 ちはじめた。(以下、孝靈記から推察)
 貴が皇子に進言した。
 日頃おつかえになつておられる天神地祇
 を、朝日の昇る方角に祭つて、かかる非道な
 温羅を打ち果せるよう、神助を祈願
 なされたらいかかでしょう。か
 うむ。それは良い考えだ。袋の中の鼠も
 同然となつてゐる温羅達をあまりにも急いで
 攻めたてたら、口窮鼠猫を噛むのたとえ通
 り、手痛い目にあうかも知れぬ。まずは
 じっくり時を待ち、兵糧攻めにしてやろう
 建吉備津日子との二人は、相揃つて、大己貴
 の勧めのままに、東の針間国(播磨国、今の
 兵庫県西南部)へ下つていった。(既述)
 針間(播磨)は、畿内(大和・山城・河内
 系和泉・摂津の五畿内)への出入口にあたる
 ので、口道の口(出入口口)と称された。

福 112 P 一矢 131 P

福 112 P 犬養毅 2708 2.695 P

2293 P 釣 12 弦の末

884 P 132 P

268 P 128 P 123 P

もつとも、針間国（播磨国）が道の口ら
とさ小たのは、
すつと後年、五畿内が定められた時以降の
となのかも知れない。
米
皇子は、神に祈った。
すると、枕頭にあらわれた神が、
千釣の強弓をもつて、一つ時に二矢を射
てみよ
とお告げになった。
そこで皇子は、早速、鬼城へ向った。
部下の大養武は犬を使つて、温羅軍を吠え脅
し、留霊臣（猿）は兵糧を集め、樂楽森彦
（雉）はろ矢を整えた。
この時、神の教え通り、皇子は二本
の矢をつかえて射かけた。
温羅は、一矢をたちまち射落した。
しかし、残りの一矢が、それと同時にグサ

（出入り口）

おんごぎ
⑤ 892P

2.696P

⑤ 883P
⑤ 886P
⑤ 2698P
⑤ 2693P
⑤ 2693P
⑤ 2693P

⑤ 363P
⑤ 363P
⑤ 363P
⑤ 363P
⑤ 363P
⑤ 363P

⑤ 374P
⑤ 374P
⑤ 374P
⑤ 374P
⑤ 374P
⑤ 374P

リと堀羅の左目を射ぬいていた。
堀羅は、~~あつめ~~首をはねられ、最期をとげ
た。(「吉備津神社」藤井駿、日本文教出版
六八七七一頁。「旅」一九八三年新年号、一
二〇一四頁。「日本の伝説」(13)へ山陽
界文化社、八二一八七頁参照)
こうして、鬼城に捕籠った堀羅達の激
しい反撃を、~~あつめ~~のもともせず、
皇子伊佐勢理毘古は、その堅固な山城を
落させた。(第十章へ拍奴国の都の項におい
て既述)

米

F → S62.2.6(金) 周章狼狽

元99 1195 8 年 1198 年 2020 年 吉川 新 193

智城 紀下363' 581' 紀下366' 紀下356' 1775'

2.697 P-1/3

ところで倭国は、この戦いによつてはからずも、温羅達の最期の砦となつた。朝鮮式山城へ鬼城の驚異的なまでの堅牢さを知らされた。

そこで後年のことながら、六六三年に白村江で惨敗し、危機感かつのつた時、多数の朝鮮式山城を築いたのであろう。

長門城・大野城・椽城・高安城・屋島城・金田城(対馬)・鞠智城(肥後)等が、次々と築かれていったようである。

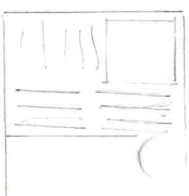
たが、七世紀のその当時には、何事も起らなかった。

ところがさらに時移り、平安朝も末の頃となつたとき、七歳になる安徳帝を奉戴した平家一門の者達が、朝鮮式山城である屋島城に身を寄せた。

いかにしながら、平家一族は、義経の奇襲に周章狼狽し、もろくもあつさり屋島城を明け渡してしまふ。

あるいは朝鮮式山城は、窮地に追い込まれた者達が死を覚悟で戦うときのみ、大きな

・カー
 ・左頁の左側に寄せ、
 はみだして下さい。



514^P



2.697^P-2/3

5293^Pにこの絵を7324^P

1304

1404

第338図 那須与一

(小堀安雄筆)

514^P

『名画にみる国史の歩み』編者 近代出版社 平成12年4月19日発行 32頁 巻頭
 源頼朝の弟義経は 寿永3年(1184)2月、一の谷(神戸)の平家軍と急襲して破れた。そこで平氏は
 屋島へ退いた。
 その1年後、義経は屋島城の南側から攻めて撃破した。日暮れかたころ、女房某の女性と
 日の丸を描いた旗の白を乗せた平氏の船が現われた。義経から「白を射せ」と命じられた那須与一は
 鎧矢を番え弓を引いた。その矢は、見事に肩の要を射た。いたん高く舞い上り、やがて海に落ちて
 やく扇を見て、敵も味方も喝采にという。それは、寿永4年(1185)2月20日頃のことと思われる。

② 2449^P 1/2 あつげ 呆気 2703^P

減 2052^P
減 2174^P

2,697^P 3

屈服(伏) 635^P
力尽きて延うこと

日本列島 2703^P 69

威力

力を發揮するようになられてゐるのかも知れ
ない。 第338回へ 那須与一 参照

*

埋められた銅鐸

海中に浮ぶ日本列島の西域を二分してゐた
二大強国、日倭国と日拘奴国との力の均衡
が、ここに一気に破れた。

すなわち、銅鐸に代表される日拘奴国が、
鉄剣に代表される日倭国の力に屈し
て、滅び去つた。

いかにも、それは思いもよらないほど実に呆気
ない、突然の滅亡であつた。

なお、
中国が、瞬時に崩壊した。

ということを物語っているのは、銅鐸である。

銅鐸は、辺鄙な山の斜面など、特別の施設

も無い所において

てい
た
な
る
行

ていちょう
郵重元1517^p

は、5
5M
2,698^p

手厚い元1510^p

へただたんに穴を掘って埋めた
とーかいいいようなない状態で発見される。

人々は、慌てふためきながらも、
「神聖な祭器へ銅鐸」だけは、倭国の兵達

から守らなければならぬ
と考へ、祈りを込め、山の斜面などにそっ

と埋め隠したのであろう。
非常に大切に敬つていた祭器は銅

鐸を、何か宗教上の理由によつて埋めたの
ならば、――当然、手厚く穴の中へ収めた

に違いない。

また、中国（中国地方を中心とする国）が
真綿で首を絞められるように「ジワジワ破れ

たのならば、――祭器は銅鐸を土
中へ隠すにしても、もっと丁寧に埋め置い

たであらう。
――か！ 実際には、そーした日郵重さしか全

く見てとれない。

まるで、
へ急いで穴を掘り、その中に銅鐸を置き

7月10日
ちよつとばかり、
3行
6行

「全」 前 175
② L

脆い 云 $1836''$
 2.699 P

といふた~~え~~な~~い~~ような出土状態である。

つとばかり掘って、何らの施設もなしに銅鑿

を横たえたもののようであり、方向性にて

も埋め方にも全然意識することなく、ひ

よ
い
と
置
い
た
く
ら
い
に
し
か
思
え
な
い
の
か
通
例

たの
ひ
ある。

／＼
銀鐸
藤森栄一、
学生社、

一
〇
三
頁
參
照

かぬミイラ
拍女国中の者達
は、
気も動顛し、
蜂の巣を

疲れた恐怖に戦
王なから北
ゲん惑
った。

盤石だと思っ
ていた強大な
国に拘奴国に
加

意外なほど
脆く、
まさに

7
あ
7
L

という間に混乱の渦の中で壊滅したのだ。また

「俺等國敗れた所を拘奴國は、兎金に換

完敗だ

「倭国に、
 2の拍奴国は敗水た。

2,700^P

→ 561.8.11(月) 改行

あか
山
宗
め
る
17?

「木、これから一体どうなるのかしら」
「やや。向うから、大勢の倭国の兵達かや
つて来るぞ。逃げろっ」
「しかし、その敗戦の動揺の時にあっても、
人々は今まで神ともあがめてきた銅鐸の行く末
に心を痛めた」
「とて銅鐸を放置」
「倭国の軍兵たちには手渡すな。」
人々は、神聖この上ない祭器、銅鐸を
抱えて、その隠れ場所を探した。
「後で掘り出せるような、目印のある所に
埋めろ」
「うむ、あそこがいい。それ急げ、あの
木の下に埋めろ。穴を掘れ」
「あんまり深くなくていいぞ。それでいい
まさか、収うに見られていないだろうな」
人々は、耳を教て、まわりを窺い、そして
倭国兵があたりになく、穴を見定めるや、
銅鐸をその穴の中へ入れ、大急ぎで
土をかぶせた。

$$2.701^P - \frac{3}{2}$$

才39年 田2439^p 39年 田2448^p 覆隠寸221^p 悲嘆 田2449-1/2
 荒神・加茂 田2448^p 荒上 田2449-1/2

とく
古
く
誓
い
合
っ
た
。

涙にむせびながら銅鐸や銅剣を穴の中に並べた人

々
は、
さら
に又、
蜂起
の時
の一助
とする
為

倭人達から奪い取った銅鐙をも穴の底に並ら

へ置き
土をかぶせて埋め
草を

ど
で
覆
い
隠
一
た
。

な
お、
こうした
ことの
詳細
につ
いて
は、
第

三十九章 八景神谷遺跡。
加茂岩倉遺跡の項

において、~~す~~はボへたとありである。
写真

圖
版
400
401
402
(403)
404
參 照

⑤ $249^{\circ} - 3/6$

⑤ $2449^{\circ} - 4\frac{1}{6}$

✱

⑤ 2449-5/6

⑤ $2449^{\circ}-6/6$

⑦ $2454^{\circ} - 3/5$

第7卷1

→ H4.4.27.(月) ⑤ 水口にて
85% 再起 立ち直ること

2,702 P-1/2 梅原未治 図版120 図録194

93-4/4

かい 三日月 大の363
塊 175 呪 慣え

それにして

何とて異常な極限の心理状態を思わせる特
異な銅鐸が出土している。

● 最早これまで命運は尽きた
と観念した者たちが悲嘆のあまり

祭器の生命である呪性を取り去って単
なる金属塊とした後、土中に埋めたのであろうか。

徳島県牛島鐸と大英博物館蔵三号鐸は、
見事に外表面の模様が敲き抜かれており、よ
く知られてい

社、二三七頁参照
銅鐸に藤森栄一、学生

先祖代々、心のよりどころとして厚く敬つ
てきた銅鐸を、心ならずも土の中に埋めなけ
ればならぬ状況に立ち到ったとき、

人々の心は、どんなに悲愴で、どんなに惨で
あつたろうか。それは想像に余る

傷ましいことがあったに違いない。

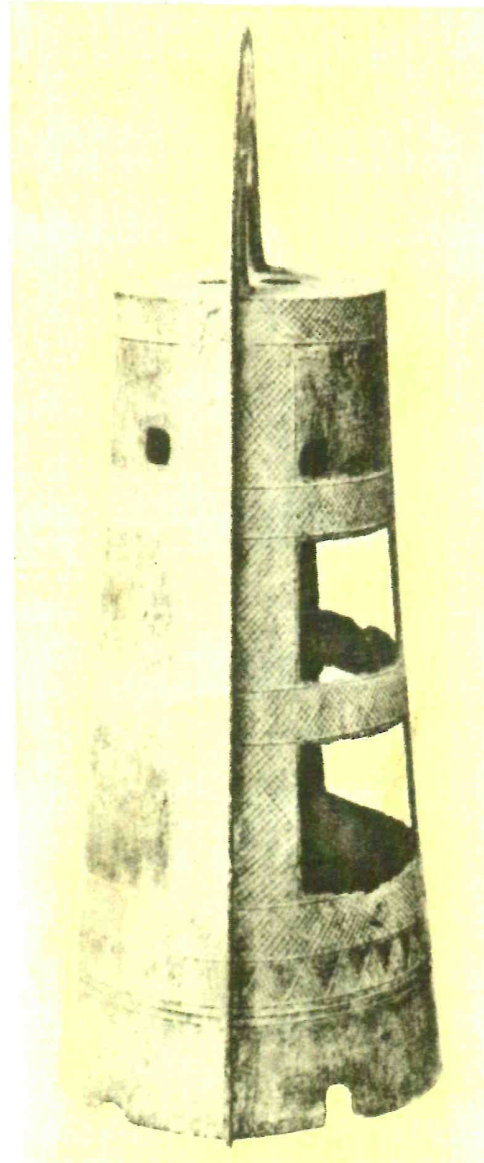
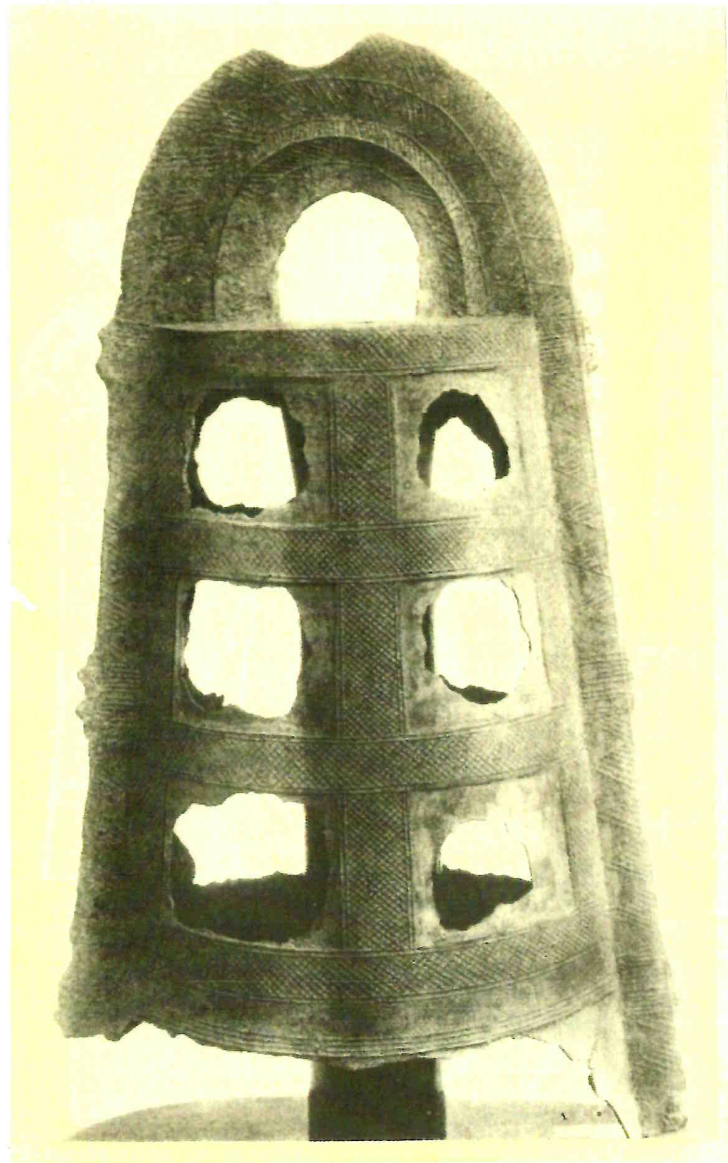
けれども、その当時の中国の多くの人々の口再
起の願いは実現せざ

銅鐸が、その後掘り出されて祭られるような

後子
この頁11行

2702^P-2/2

・カラー
・頁の上半分に掲載
下さい。



おえ
麻植郡
はつたろカイト 367
地名辞 331^P

1404 写真図版458 徳島県^{おえ}麻植郡牛島銅鐸

13 04 『銅鐸の研究』(図録篇)^{うめはらすい}梅原未治、木耳社、昭和60年11月13日発行、復刻版、第120、第144参照。

1404 写真図版459 大英博物館所蔵第三号銅鐸

